

# 知識経済を 加速させる 実験都市の試み

ワン・ノース  
one-north

所在地：  
シンガポール  
概要：  
科学（生医学）・情報通信技術・メディア・ビジネス等の新興開発地区にある科学複合施設。民間部門の研究機関が公共部門の研究機関、三次医療機関、大学と同じ敷地内に入居し、官民の研究者間の連携を促進するとともに、世界中から科学者や研究者、起業家を受け入れている。  
URL：  
<https://www.jtc.gov.sg/industrial-land-and-space/pages/one-north.aspx>



上/バイオポリスの外観。© Agency for Science, Technology and Research (A\*STAR)  
下/ワン・ノースの広大な敷地。© JTC Corporation

## 世界中から優れた 研究者たちが集結

1997年に始まるアジア通貨危機をほぼ「無傷」で乗り切った後、シンガポールは知識・イノベーション集約型経済を目指す方向へと一気に舵を切ったといわれる。政府はどんな研究分野を選択的に支援し、そして企業や大学、研究機関とも連携しながら、いかに外からの資本や人材を呼び込んでいけるのだろうか？

それを知るために私たちは島の南西部、シンガポール国立大学にも近いブオナビスタ地区に位置するワン・ノースを訪れた。ワン・ノースとは「北緯1度」の意味。広大な公

園とも未来都市とも見えるこの場所は、今世紀に入って整備が進んだ200ヘクタールにも及ぶ開発地区であり、建築家ザハ・ハディド氏が意欲的なマスター・プランをつくったことでも知られている。

「ここワン・ノースには約4万6000人の人が働いていますが、その多くが海外からやってきた研究者の方々です。まさに世界中から。もちろん、武田薬品をはじめ日本の企業からもたくさんの方がいらしてますよ」

少し胸をはるように説明してくれたのは、A\*STARの産業開発部門（国際）で副部長を務めるワン・ペイイー（Wang Pei Yi）氏。A\*STARは2002年に設立されたシンガポール科学技術研究庁の略称で、人材の育成や研究開発の促進、研究者や研究機関の国際交流など、さまざまな形で研究開発をバックアップする、国の科学政策におけるいわば司令塔だ。

ワン・ノースのなかでもとりわけ重要なふたつの中核エリアのひとつ「バイオポリス」には、バイオメ

ディカル（生体医学）分野に重点を置いた研究開発拠点が集まる。もうひとつの「フュージョノポリス」は、ITやメディア産業などが文字通り分野の垣根を越えて集まる巨大な複合施設だ。どちらも最新の設備を有するのみならず、周辺の医療施設、大学などの連携もスムーズに行われる。ここに集まる研究機関を監督し支援を行うのがA\*STARの仕事であるが、それはむしろ、いかにここを自由に使ってもらうかに知恵を絞る仕事であるように見えた。

「ワン・ノースは、さまざまな実験を行うために規制を外したサンド

ボックス（砂場）のような役割も果たしています。たとえば自動運転車の実験も、公道ではできないけれども、ワン・ノースの敷地内では試すことができます。そのためにはエンジニアだけでなく、法律の専門家や行政など、さまざまな分野の人が協力し合わなければなりません。ここではそれが当たり前です。はじめにテクノロジありきでサンドボックスをつくったのではなく、むしろサンドボックスが先で技術が後からどんどん出てきたようなイメージです」

都市、あるいは国全体がひとつの

「実験室」のようなイメージもあるシンガポールだが、ここはその理想的なあり方を追求した「研究開発の楽園」を目指しているようだ。

## 異なる人が出会い、 異なる人を呼ぶための装置

限られたリソースのなかでどのような研究分野を重視し、人員や予算を重点配分するかをコントロールするのも、A\*STARにとって重要な仕事だ。

「シンガポールには5年後、10年後の未来社会を予測する青写真があり、それに従って人材育成を進めています。主要な4つの大学から人材が十分に供給されるよう、早くから適切なコースづくりを進めているのです。

2000年に政府はバイオメディカル分野を進展させようと決定しましたから、各大学では生物学や生化学のカリキュラムを充実させました。これに合わせてA\*STARも多くの予算を投入しました。それが今、この国におけるバイオメディカル部門の急速な発展という形で実を結んでいるのです」

大学を卒業後、スタートアップを目指す若い人たちが支援するための場所も、ワン・ノースのなかにある。JTC Launch Padと呼ばれるこの施設は、もとは解体寸前の工場団地だったという。多くのベンチャーキャピタルとスタートアップがここで活動しており、なかには複数の政府系ベンチャーキャピタルもある。

大きな政府の力がここでも民間、あるいは海外から力をうまく引きだそうとしている。

ワン・ノースのなかには、まだ建設や整備が続いているように見える地区もいくつかあった。たとえば、まだ真新しい「メディアポリス」は、今後、国際市場向けのコンテンツを制作するデジタル・メディアの中心となるべく設計されている。全体として、退屈になりがちな研究施設のなかに、暮らしや学び、エンターテインメントの要素を積極的に混ぜこんでいこうとしているのも大きな特徴と感ぜられた。

「シンガポールはもともと人口密度が高く、国土に限りがあるので、異なるもの同士をつないでいくことは

得意かもしれません。シンガポールには人しかいないし、簡単に人と会えるのがシンガポールのよさですから」

ワン・ノースは異なる人が出会い、異なる人を呼ぶための場であり装置である。こうした「実験都市」としての経験は、シンガポールがこれから積極的に海外へ売り込んでいくという都市ソリューション分野における重要な事例のひとつにもなるだろう。まずはシンガポールで成功させ、その成功体験をアジアで売っていく。したたかな戦略のなかに、研究都市ワン・ノースの行く末は、この国の未来としっかりと重なっているように感じられた。



お話を伺ったワン・ペイイー氏（左）と広報担当のロビン・チャン氏。



バイオポリス内にあるA\*STARのラボの様子。  
© Agency for Science, Technology and Research (A\*STAR)